

自由部門 優良賞「私を創る」

文学部日本文学科 4年2組 津 帆香

自分の世界に浸ることが好きだ。絵を描き、文字を綴り、自分の世界を形にすることが好きだ。そして、それを他人に見てもらふことも、感想をもらふことも好きだ。

私は、創作が好きだ。

きっかけなんてありきたりで、外で遊ぶより図書室に通うのを好み、本ばかり読んでいた。美術の時間が好きで、教科書の絵をいつもじっくり眺めていた。それだけの理由の先に、いつしか私の創作への道は開かれたのだ。

小学生の頃から絵を描くことはしていたが、活動範囲が大きく広がったのは高校生からである。初めてのスマホでネットに触れ、影響されてお絵描きアプリをインストールし、部活では入学初日から文芸部に入部届けを出した。一人で自己完結していた世界から、自分の作品を公開する世界へと広がった訳だ。

高校の文芸部では「その時期、その瞬間、あなたにしか感じられないもの」をテーマにすることが特に薦められていた。四季の変化や学校行事、家族や友人関係、進路や将来など、高校生の私の目で見たと、聞いたこと、それを受けて感じたことを詩や小説などに込めて作品を書いた。あるいは季語を決めて匿名で俳句を詠み、好きな作品に投票する遊びもした。筆が進まなかったり言葉選びに迷ったりした時、先輩や顧問の先生に相談して、自分の考えがまとまっていく感覚も楽しかった。初めての文化祭で、完成した部誌に私の作品が載っていた時は、たまらなく感動した。後に編集長を任せられ、部長と話し合い、自分が編集し表紙も描いた部誌が完成した時も、創り上げたという達成感と高揚感があった。

絵に関しては完全な趣味で、けれど上手になりたいから描き方についての本を買った。デジタルで絵を描くのは初めてだったので、ネットを使って機能を調べ、片端から色々な塗り方を試した。いいなと思った人の絵柄を真似して、参考書に書かれている方法で反復して絵を描いて、今もまだまだ勉強中だ。一つの絵に長く時間をかけるから筆は遅いが、その分完成したものはその時の最高傑作なので、自信満々で投稿する。後から見直して「ここおかしかったな」と思うこともあるが。

変わったことは活動範囲が広がっただけではない。それと同時に他人から評価されるようにもなった。部活では大会に応募して賞を、ネットでは好意的な感想を多くもらった。反応の数に一喜一憂したり、人と比べて筆を折ろうかと思ったりすることもあったが、そ

れを吹き飛ばすくらい、評価は私の昇華に繋がり、自信にもモチベーションにもなっている。

実際、自信は相当ついた。過去の作品を引っ張り出して「この作品の特にこの一文は上手く書けた」と何度も思うし、完成した絵を眺めて「実は私めっちゃくちゃ絵を描くのが上手いのかも」と自画自賛することがある。今まで積み重ねてきた経験が、十分に発揮できている時の私は無敵だった。

高校の顧問の先生から聞いた。「自分の作品を表に出すことは、全裸を人前に晒すのと同じくらい恥ずかしいが勇氣あることだ」と。確かにそうだ。他人に自分の作品を見せるのは普通に会話するよりも恥ずかしく、時には怖いとも思う。ではなぜ、私はそれでも創作を続けているのだろう。考えたところ、大きく分けて理由は二つ。

どちらかという口下手で内向的な性格、言いたいことは抑え込むタイプの私は、その反動で溜め込んだものを創作で吐き出している。文字を綴る時の私は誰よりも饒舌で、絵を描くときの私は誰よりも自信家だ。今みたいにぺらぺらと自分の胸の内を喋るし、私以上に私が考えたキャラクターを上手く描ける人はいないと思っている。

創作に限らず、私は文字にすることで気持ちに整理がつくし、絵にすることで考えが膨らむ。これが最もハッキリと自分を表現できる手段で、それを存分に発揮できるのが創作だった。エッセイも俳句も短歌も、小説もイラストも全て、創作は私自身を表現し、私の思考や感覚を共有し、私の存在を主張するものだ。一丁前に自己顕示欲は持ち合わせているから、創作という形で自分を主張して、評価を求めて公開している部分はある。それも創作を続けている確かな理由の一つだ。

もう一つは、何より楽しいから。

自分の想いが、目に見える形になった時の喜びを知っている。私の作品が好きだ、と笑ってくれた人を知っている。評価された作品を、褒めてくれた人の言葉を覚えている。出来ないことを練習して、出来るようになったこれまでの成長を感じている。過去の作品を見返して、その時自分がどう感じていたかを思い出せる。

創作をしていると、そんな楽しみがどんどん増えてやめられない。

私は私のために創作をしているけれど、同時に評価が欲しくて人のために創作をしている。正反対なものを同時に抱えて面倒になることもあるが、それでも私にとって創作はきっと一生の趣味だ。創作は私自身でもあるのだから。

だから、こう宣言してやろう。

刮目しろ。これが私だ。

<講評>

自分が大切な趣味とする「創作活動」について、己の実体験を基にして自分なりの深みのある思索を重ね、歯切れの良い上手な文章で書き綴った秀作である。読者の興味を強く惹きつける書き出しになっており、エッセイ全体を通して、飽きがない、流れるような文章と文章構成になっている。加えて筆者は、文章や絵を自分の作品として表現し、デジタル絵画でも評価してもらい「自分の世界」に誇りを持っている。そして自分の世界は絶対であり、何人たりも真似できない世界であると自信満々である。しかし、実際はそこはかたない自信のなさを読者に感じさせる点が健気であり若者らしさを感じさせる優れたエッセイに仕上がっている。

審査委員／永田彰子、吉目木晴彦、大庭由子、西村聡生、富岡治明（委員長）